

令和元年6月3日現在

機関番号：35413

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01787

研究課題名(和文) 子育て期の社会的ネットワーク拡充再構築のための「社会的代理人」の活用に関する検討

研究課題名(英文) Examination about utilization of "social surrogates" for expansion and reconstruction about social network in child-rearing period

研究代表者

西村 太志 (Nishimura, Takashi)

広島国際大学・心理学部・准教授

研究者番号：30368823

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、よりよい子育てを行うためには、子育て期の養育者が多様なサポートネットワークを持つことが重要であるという観点から、養育者の対人資源を広げる「社会的代理人」の機能に着目した研究を行った。その結果、周囲との良好な対人関係の中で、配偶者や妊娠前からの友人などを「社会的代理人」として利用することが、出産後のネットワークサイズの維持や拡充に寄与することが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子育て中の対人ネットワークの維持・拡大や縮小を抑制する効果に関して、「社会的代理人」の概念を適用したことが本研究における学術的・社会的意義である。子育て期の人々に、「社会的代理人」の活用の意義を示すことは、孤立からの回避のためのきっかけを提示することになる。さらに、子育てに関する周囲の人々や支援者が「社会的代理人」の機能を理解し、子育て期の人々と地域社会をつなぐ役割をより一層担うようになり、その結果地域社会での子育て環境や体制の充実の促進にも寄与すると考えられる。

研究成果の概要(英文)：From the viewpoint that it was important to look into child-rearing from the viewpoint of social psychology, this research focused on the function of "social surrogates" as others to expand the interpersonal resources of the mothers. Social surrogate hypothesis is that some people, especially with low social skill (e.g., high shyness), use a familiar other as a social surrogate to cope with new social situations. We regard this idea as useful for explaining the expansion and re-construction of social networks. From the results of several studies, we suggest that it would be useful to use their spouse and old friends as social surrogates for expanding their social support networks.

研究分野：社会心理学

キーワード：社会的代理人 子育て 夫婦関係 シャイネス 自己効力感 対人ネットワーク 妊娠期

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

妊娠から出産、および子育て期（特に乳幼児期）には、母親の対人関係の特徴が大きく変化すること、そのために適応状態が変化することが指摘されている。例えば、友人関係ネットワークサイズの縮小と情緒的サポートが減少しやすい(e.g., Gameiro et al, 2010)。そして、加藤(2012)は、母親のネットワークの広さが心理的にポジティブな影響を与えていることと、家族との関わりが多いほど母親の幸福感が低いことを示している。この点から、養育者がサポート源の中核にある配偶者や親族とのみ関係を維持し続けることは、ネガティブな影響が生じやすく、その一方で、非親族である地域コミュニティの住民や友人・知人、職場の同僚といった人々との関わりが相対的に必要になると考えられる。しかしながら、それを日々の対人相互作用の中で具体的にどのようにして構築すればよいのかについて、先行研究で明確な結論は出ていない。子育て期の人に、「よりよい子育て」に資する対人関係構築の為の具体的な処方箋を提示することは、本研究の重要なミッションである。

そこで本研究では、Bradshaw(1998)が示した「社会的代理人」仮説に基づく対人ネットワークの拡充のプロセスを、出産を契機にネットワークが縮小しその後拡大を必要とする子育て期の養育者に適用して検討する。「社会的代理人」仮説とは、対人関係の構築に苦手意識を持つ人が、入学や就職など新規の対人関係を広げる必要がある場合、既知の人物(=社会的代理人)をその場に伴うことで、その状況への不安などを低減させ、相互作用を社会的代理人が支援し、対人関係を拡充することができるというものである。Souma et al(2008)は大学新入生へのパネル調査から、シャイな人であっても自身の友人が社会的代理人として機能していると、シャイではない人と同様の新規友人の獲得ができることを示している。Bradshaw(1998)や Souma et al(2008)は、学生を対象として新規の対人関係の拡充を扱っているが、Gameiro, et al(2010)などの知見を踏まえると、子育て期の対人ネットワークの再構築・維持に、母親が周囲の他者を「社会的代理人」として用いることは、養育者自身の心理的適応や社会的適応にポジティブな影響を及ぼすと考えられる。逆に社会的代理人として周囲の他者が困難なことは、社会とのつながりを失い孤立のリスクが高まり、虐待や不適切な養育の促進要因ともなり得る。

### 2. 研究の目的

本研究課題では、以下の4つの観点から研究を行った。

(1) 周囲の誰が「社会的代理人」になるのか? : 養育者の周囲には、配偶者や親族、友人など様々な対人資源が存在している。これらの人物はそれぞれ異なる役割を有しており、子育てに伴って関係が密になるものもあれば、疎になるものもある。そこで、養育者が自身の対人ネットワークから選択する社会的代理人との関係性の特徴を把握する。

(2) 養育者は「社会的代理人」に何を求めるのか? : 社会的代理人が提供する機能は、新規の場に伴うことが重要な要素であるが、その同伴がもたらす機能については不明瞭である。社会的代理人となる人物が持つ機能を検討する。

(3) 「社会的代理人」の活用に影響を及ぼす要因は何か? : Bronfenbrenner (1979) は生態学的な発達心理学の視点から、子供を取り巻く生態環境と社会的ネットワークの重要性を指摘している。そこで本研究では、社会的代理人の活用のあり方に影響を及ぼすマクロ要因とミクロ要因の検討を行う。マクロ要因については、西村ら(2013b) が示すように、居住地域の流動性などが子育てを契機として構築される周囲への評価に影響を及ぼしているため、流動性に関する指標の影響を検討対象とする。ミクロ要因については、社会的代理人の利用や選択には、シャイネスが影響するため(Souma et al., 2008)、これらの変数の影響を検討する。

(4) 子育ての時期(段階)に応じて「社会的代理人」の活用のあり方は異なるのか? : 子どもの成長に応じて、養育者が接する周囲の対人環境も変化する。厚労省通達に基づく乳児検診と1歳6ヶ月検診の約9割が集団形態または集団個別併用の実施であり(下地, 2011)、集団検診によって保健師との連携促進や同世代の子どもを持つ親との接触が高まると考えられる。これらの時期に周囲の社会的代理人の活用と変化の様相を把握することは、時期に応じた子育て支援に有用である。そこで、妊娠期とその薬1年後、さらにその1年後に縦断的な調査を実施し、社会的代理人の活用の変容過程を検討する。

### 3. 研究の方法

主たる検討として実施した、横断的調査および縦断的調査についてそれぞれ説明する。

#### (1) 横断的調査による検討

調査対象者: (株)クロスマーケティングのモニターのうち、既婚者で配偶者と同居しており、就学前の子どものみを養育している女性600名。なお全てのデータ分析では、回答における論理的矛盾が含まれる回答を除き、545名(平均年齢30.60歳)を対象とした。調査時期・手続き: 2015年10月上旬にオンライン調査を実施。主な分析使用尺度: (1)フェイスシート: 年齢、子どもの数、就業状況などを尋ねた。(2)「社会的代理人」の選択の有無: 「1. 配偶者」、「2. 配偶者以外の家族(自分の親、配偶者の親、自分のきょうだい、配偶者のきょうだい、自分の親族、配偶者の親族)」、「3. 友人・知人(出産前から、出産後子育てをきっかけ、出産後子育て以外のきっかけ)」、「4. 自身の子ども」を社会的代理人として設定した。「子どもが生まれ、子育てをすることをきっかけに、あなたがあなた自身の人とのつながりをどのように変化させていったのか」というご自身の経験についてお聞きします」と教示を行い、「対象者自身の子育てに役立つ

人とのつながりを増やすために、4つの対象人物と一緒に行動したこと」の有無を尋ねた。(3) 関係流動性尺度：Yuki et al. (2007)の尺度を用いた。(12項目・5件法、 $\alpha=.79$ )。(4) シャイネス：相川(1991)の尺度を用いた(16項目・5件法、 $\alpha=.93$ )。

(2) 縦断的調査による検討

調査対象者、調査概要：第一波調査(T1)は、2016年11月に(株)クロスマーケティングのモニターのうち、既婚者で配偶者と同居しており、回答時点で妊娠16~40週に該当する女性928名に実施した。なおデータ分析は、satisfice項目への回答が適切であった、805名(平均年齢：31.05歳)を対象に行った。第二波調査(T2)は、T1分析対象者805名を対象に、2017年9~10月に調査回答をオンラインで依頼し、201名から有効回答を得た。第三波調査(T3)は、T1分析対象者805名を対象に、2018年5月に調査回答をオンラインで依頼し156名から有効回答を得た。いずれも既婚で配偶者と同居(T2以降は配偶者と別居も含む)しており、T2以降は同居している子どもがいるという条件に合致した回答者である。主な分析使用尺度：(1)サポートネットワーク(T1~T3)：「あなたの相談にのったり手助けしてくれるとあなたが思っている人は、どのくらい周りにいますか。およその人数でお答えください。」と教示し、0~10人までの選択肢(段階は1人ずつ)、それ以上の場合実数入力を求めた(12段階)。(2)「社会的代理人」としての他者の利用状況(T1)：子育てに役立つつながりを増やすために「他者」を介して人付き合いを拓げた経験について、T1の妊娠前についてのデータを用いた。対象「他者」は「配偶者」「自分の親」「配偶者の親」「自分のきょうだい」「配偶者のきょうだい」「自分の親族」「配偶者の親族」「結婚前からの友人」である。「よくあった」「多少あった」「全くなかった」「該当する人がいない(配偶者以外)」で回答させた。(3)特性シャイネス(相川, 1991)16項目5件法( $\alpha=.92$ )。

4. 研究成果

(1) 母親は社会的代理人と何をしているか、そして何を期待しているか？

目的の(1)(2)の検討として、方法で示した横断調査データから、以下のことが示された。

1-1. 配偶者、配偶者以外の家族、友人・知人を伴った経験の自由記述を形態素解析し、集計した(表1)。その結果、社会的代理人となりうる人物の代名詞に関しては、配偶者、母親、友人という順で出現回数が多かった。次に、「地域」、「公園」、「センター」、「イベント」、「教室」などの場も頻出単語の上位として現れた。その他にも、「交流」や「情報」を「交換」することなど、人とのつながりを増やす場のやりとりも確認された。

1-2. 具体的な記述内容の一部をまとめた(表2)。また別途行った対応分析の結果、「配偶者」と関連性高い単語として「保育園」、「妊娠」、「仕事」、「休日」が、「家族」と関連性高い単語として「自宅」、「休業」、「交流」、「遊び」が、「友人・知人」と関連性高い単語として「同級生」、「サークル」、「コミュニティ」、「情報」、「交換」などが示された。

1-3. 対象ごとの社会的代理人としての選択理由を検討した(表3)。配偶者は「誘いやすい」という勧誘の側面と、「一緒にいてくれると落ち着く」というパフォーマンスの上昇という側面が強く示された。誘いやすく行動を共にすることで心理的安定をもたらすという関係の良好さは、自身の対人ネットワークの拡充にも寄与することが示唆されたと考えられる。

(2) 夫婦関係満足度が社会的代理人として「夫」の利用を促進し、ネットワークを拓げる

研究目的の(1)(2)(3)の検討として、子育てにおいて、夫を「社会的代理人」として利用することは、妻(女性)のネットワークの拡充を実際に導くか否かを検討した。多くの先行研究の知見から、良好な夫婦関係が夫の代理人としての利用やネットワークの拡充をもたらす可能性が示唆される。このことを検証するために、方法(2)に示した縦断的調査のT1およびT2のデータを用いた分析を行った。

まず、妊娠中(T1)のデータを用いた媒介分析の結果から、良好な夫婦関係は、妻(妊婦)のサポートネットワークサイズを拓げることが示された。さらに、妊婦において夫を社会的代

表1. 上位30の抽出語句と出現回数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1 子ども	855	11 遊ぶ	144	21 情報	95
2 行く	318	12 お話	127	22 知り合う	95
3 一緒	277	13 センター	121	23 交流	91
4 配偶	251	14 育つ	111	24 休日	86
5 地域	202	15 連れる	111	25 交換	85
6 参加	191	16 支援	106	26 親	81
7 母親	180	17 イベント	102	27 教室	75
8 公園	168	18 自宅	102	28 近所	72
9 友人	167	19 年齢	102	29 仲良く	66
10 育児	148	20 育て	100	30 出産	63

表2. 抽出語句を含む自由記述内容

母親の年齢(歳)	対象者	自由記述内容
29	配偶者	旦那が休みの日に、子供を連れて公園に行き同じような年代の子供を連れてご家族と一緒に遊んだ。
29	配偶者	私は専業主婦なので配偶者の仕事が休みの日に市町村が行っている子育て支援の集まりに長男が1ヶ月の歳一緒に連れて行き四つくらいの子供を持つ保護者の人や地域の人と話をした。
38	家族	育児休業中に自分の母親と地域のボランティアサークルに参加し、母親世代の方たちと交流することで子育てに関する実用的な情報を得た。
28	家族	引っ越したばかりの地域で母と一緒に公園に行った。母は来ている人に気軽に話しかけるのでその地域の幼稚園や公園の情報を教えてもらうことができた。
28	友人	友人にランチに誘ってもらい、友人の友人も来ており、そこで情報交換を繰り返した。
26	友人	元同僚とお互いの子どもをつれて週1で支援センターへ行った。同僚の子もまたちと遊ばせたり、支援センターの先生に相談事をしたりした。

表3 対象別の選択理由得点の平均値、標準誤差、分散分析の結果

	利用有り人数 (545人中)	勧誘(A)	利用(B)	上昇(C)	F値	偏 $\eta^2$	p値	多重比較 (Holm法)
配偶者	293	3.98 (0.06)	3.35 (0.06)	3.90 (0.06)	61.51	0.17	.00	A≧C>B
家族	268	3.87 (0.06)	3.82 (0.06)	3.89 (0.06)	0.77	0.00	.46	
友人・知人	280	3.71 (0.05)	3.79 (0.05)	3.82 (0.05)	2.44	0.01	.09	
子ども	400	3.62 (0.05)	3.89 (0.05)	3.63 (0.06)	13.13	0.03	.00	B>A≧C

註：括弧内は標準誤差

理人として利用していることが、サポートネットワークサイズを拡大することになることも示された。加えてこれらの媒介効果は、経産婦において顕著に示された(図1、図2)。

さらに、T1(妊娠中)とT2(出産後)両方のデータを用いた検討から、妊娠中は夫婦関係満足度の高さは夫の利用を促し、ネットワークサイズの拡充となるが、出産後は、そのような関連性は認められないことが示された。これは、出産前に、対人関係維持のために夫を「社会的代理人」として利用することが重要であることを示すものである。

### (3) 社会的代理人の選択に異なるレベル変数が及ぼす影響

研究目的の(3)に示した「社会的代理人」の活用に影響を及ぼす要因の検討として、社会的代理人の活用の方々に影響を及ぼすマクロ要因とミクロ要因の検討を行った。マクロ要因については、流動性に関する指標の影響を、ミクロ要因については、シャイネスの影響を検討した。

方法の(1)横断的調査データを分析対象とした。社会的代理人の4対象の選択有無それぞれに対して、母親の年齢等を統制し、関係流動性とシャイネスの主効果および交互作用項を投入する階層的ロジスティック回帰分析を行った(表4)。その結果、シャイネスの主効果は全ての対象において認められた。シャイネスが高い人のほうが、これらの対象を社会的代理人として選択していないことを示している。

### 関係流動性の主効果とシャイネス×

関係流動性の交互作用効果は、友人の代理人選択においてのみ認められた。関係流動性の高さは対人関係の選択肢が多いことを意味するので、友人を代理人として選択することは、母親の対人関係の拡充にも寄与すると考えられる。交互作用に関しては、シャイネスが低い場合、関係流動性が高いと友人を社会的代理人として選択することが示された。子育てにおいて、友人を社会的代理人として利用することは、他者との関係構築に抵抗がなく(低シャイネス)、多様な関係性の構築が容易である環境にいる(高関係流動性)ことが必要である。

表4 対象別の階層的ロジスティック回帰分析の結果

変数名	配偶者		親族		友人・知人		子ども	
	B	$\Delta R^2$	B	$\Delta R^2$	B	$\Delta R^2$	B	$\Delta R^2$
基準変数(0=非選択, 1=選択)	-0.14		0.05		-0.05		-1.02 **	
母親の年齢	0.03		-0.02		0.03 +		0.03	
S1 子どもの数(0=1人, 1=2人以上)	0.12		0.08		0.49 **		0.08	
職業(0=無職, 1=有職)	0.01	.006	0.20	.005	-0.21	.027 **	-0.10	.007
S2 シャイネス	-0.36 **		-0.38 **		-0.30 *		-0.28 *	
関係流動性	-0.20	.023 *	-0.03	.025 *	0.35 *	.031 **	0.08	.016 +
S3 シャイネス×関係流動性	0.13	.001	0.05	.000	-0.52 *	.020 *	-0.29	.007

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , +  $p < .10$

### (4) 出産前のシャイネスと社会的代理人利用が産後のサポートネットワークに及ぼす影響

研究目的の(4)に関連する分析として、方法(2)の縦断的データを用いた分析を行った。

シャイネスが高い妊娠中の女性であっても、社会的代理人として周囲の他者を利用できれば、産後のサポートネットワークが縮小しやすいつ時期になったとしても、対人関係を維持構築できると考えられる。さらに、シャイネスが高いほうが関係継続期間は長くなりやすい(Goering & Breidenstein, 1989)ため、シャイナ人にとって社会的代理人として旧知の人物を利用することが肯定的に作用すると考えられる。そこで、「社会的代理人」として周囲の重要他者を利用することとシャイネスが産後のサポートネットワークに及ぼす影響を検討した。

サポートネットワークのT1平均値は4.01人、T2平均値は3.79人であった。対象となる8つの属性を分類するために、クラスタ分析(ウォード法、3クラスタ指定)を行い、「配偶者」クラスタ、「結婚前からの友人」クラスタ、それ以外(「親族」の6変数)クラスタと分類した。

産後のサポートネットワークに、出産前のシャイネスと社会的代理人としての周囲

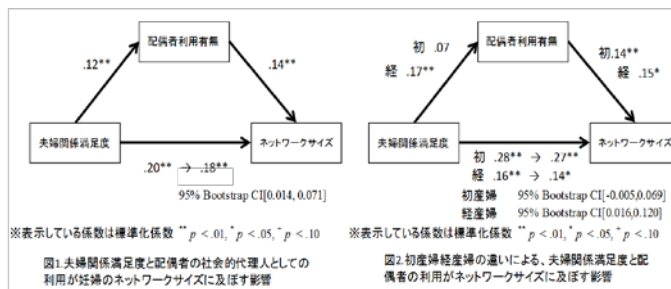


図1 夫婦関係満足度と配偶者の社会的代理人としての利用が妊婦のネットワークサイズに及ぼす影響

図2 初産婦経産婦の違いによる、夫婦関係満足度と配偶者の利用がネットワークサイズに及ぼす影響

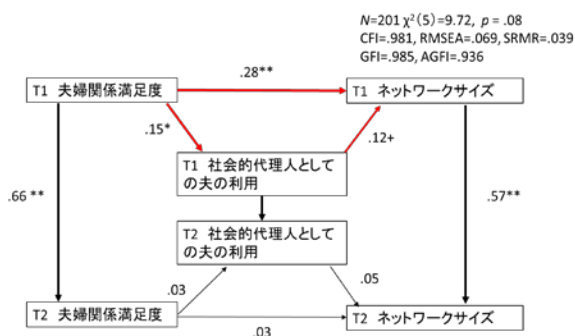


図3 妊娠中および出産後の夫婦関係満足度、社会的代理人としての夫の利用、およびネットワークサイズの関連性

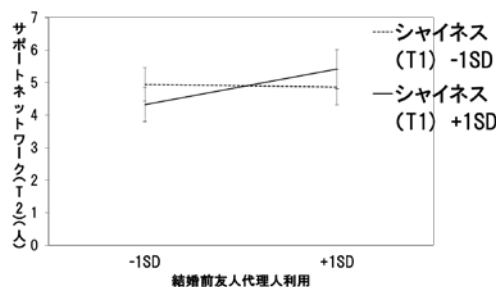


図4 シャイネス×結婚前友人の代理人利用の交互作用効果



の人物の利用が及ぼす影響を検討するために、step1にT1のサポートネットワーク step2にT1での3つの対象の社会的代理人としての利用状況、step3にT1でのシャイネス得点、step4にT1シャイネス×社会的代理人利用(3対象それぞれ)を投入する順序回帰分析を行った。その結果、step1の説明率が有意、step2の説明率の増分が有意傾向、step4の説明率の増分が有意傾向であった。ここで着目すべきは、step4の結婚前友人利用×シャイネスの交互作用効果である。この結果について、シャイネスをスライス変数とする検討を行った(図4)。シャイネスが高い場合、結婚前からの友人を妊娠前に「社会的代理人」として利用していることが、出産後のサポートネットワークが大きかった( $B=0.79$ ,  $Z=2.07$ ,  $p < .05$ )。

これらの結果から、シャイな女性は、旧知の友人を社会的代理人として妊娠前から予防的に利用しておくことが、出産後のサポートネットワークに肯定的な影響を及ぼすことが示された。

結果をまとめると、(1)社会的代理人としての「夫」に求める機能は、誘いやすく、一緒にいてくれると落ち着くという側面が強く、「子ども」に対して求める機能は、自身の対人ネットワークの積極的拡がりという側面が強い。(2)夫婦関係満足度が高いと社会的代理人として「夫」の利用を促進し、ネットワークを拡げる。この効果は、出産前(特に経産婦)は認められるが、出産後は認められない。(3)シャイな女性では、旧知の友人を社会的代理人として妊娠前から予防的に利用しておくことが、出産後のサポートネットワークに肯定的な影響を与える。

これらの成果は、学会における研究発表や自主シンポとして発表を行った。また、一般向け公開講座等でこれらの成果の紹介を行い、今後子育て支援にも寄与する情報発信を行い、関連する研究成果との融合を図っていく。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 6件)

- ① 西村太志・古谷嘉一郎・長沼貴美 (2018). 居住地の社会増減率と親との居住距離が子育てに関する評価に及ぼす影響. 応用心理学研究, 43(3), 277-278. (査読有)  
[https://j-aap.jp/JJAP/JJAP\\_433\\_277-278.pdf](https://j-aap.jp/JJAP/JJAP_433_277-278.pdf)
- ② 片桐咲恵・西村太志・古谷嘉一郎・相馬敏彦・小杉考司 (2016). 子育て中の母親はどのようにして対人関係を拡げるのか? —「社会的代理人」利用状況の自由記述を用いた探索的検討— 山口大学教育学部研究論叢 第66巻第3部 83-94.  
<https://ci.nii.ac.jp/naid/120005971084>
- ③ 梅田弘子・島谷智彦・長沼貴美 (2017). 乳幼児を育てる共働き家庭の家族機能の特徴 —夫婦それぞれの評価に着目して— 広島国際大学看護学ジャーナル, 14, 57-67.  
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hirokoku-u/metadata/12324>
- ④ 田中利枝・長沼貴美・永見桂子 (2016). 早産児の母親の育児に関する国内研究の現状と課題 母性衛生, 57(2) 467-474. (査読有)

[学会発表] (計 25件)

- ① 西村太志 (2018). 子育て期の女性対人ネットワークと「社会的代理人」の利用 西村太志 (企画代表者・話題提供者)・相馬敏彦 (企画者・司会者)・古谷嘉一郎 (企画者)・宮島健 (話題提供者)・川本大史 (話題提供者)・石盛真徳 (指定討論者)・加藤道代 (指定討論者)・長沼貴美 (司会者) SS-055 社会の中の家族、家族の中の個人 —社会心理学の視点から子育てを考える— 日本心理学会第82回大会 公募シンポジウム (仙台国際センター, 2018年9月)
- ② 西村太志・古谷嘉一郎・相馬敏彦・長沼貴美・坪田千喜 (2018). 出産前のシャイネスと社会的代理人利用が 出産後のサポートネットワークに及ぼす影響. 日本社会心理学会第59回大会, 51 (追手門学院大学, 2018年8月)
- ③ 古谷嘉一郎・相馬敏彦・長沼貴美・西村太志 (2018). 出産前後における抑うつ変化の促進要因としての完全主義—潜在変化モデルによる検討—. 日本社会心理学会第59回大会, 224 (追手門学院大学, 2018年8月)
- ④ Nishimura Takashi., Furutani Kaichiro., Soma Toshihiko., & Naganuma Takami. (2018). Whom does women after giving birth use as a social surrogate? Utilization of social surrogates as a function of shyness and relational mobility. Poster presented at 29th International conference of Applied Psychology (ICAP 2018). Palais des congrès de Montréal, Montréal, Canada. June 30th, 2018.
- ⑤ 西村太志・長沼貴美・古谷嘉一郎・相馬敏彦・片桐咲恵 (2017). 妊婦の対人関係に関する検討 (1) —夫婦関係満足度と社会的代理人としての夫の利用が妻のネットワークサイズに及ぼす影響—. 日本社会心理学会第58回大会, 181 (広島大学, 2017年10月)
- ⑥ Nishimura Takashi., Furutani Kaichiro., Soma Toshihiko., & Naganuma Takami. (2017). What factors affect the use of one's spouse as a "social surrogate" before and during pregnancy? Poster presented at 12th biennial conference of the Asian Association of Social Psychology (AASP 2017). Massey University, Albeny Campus, Auckland, NEWZEALAND. August 27th, 2017.
- ⑦ 片桐咲恵・西村太志・小杉考司 (2016). 子育て中の母親のネットワーク構築過程の検討 —「社会的代理人」利用に関する自由記述を用いて—. 中国四国心理学会第72回大会,

57. (東亜大学, 2016年10月)
- ⑧ 西村太志・古谷嘉一郎 (2016). 子育てにおける「社会的代理人」選択に関する検討 (1) -対象別の選択理由の特徴- 日本応用心理学会第83回大会, 110. (札幌市立大学, 2016年9月)
- ⑨ 古谷嘉一郎・西村太志 (2016). 子育てにおける「社会的代理人」選択に関する検討 (2) -自尊心と一般的信頼が代理人選択に及ぼす効果- 日本応用心理学会第83回大会, 111. (札幌市立大学, 2016年9月)
- ⑩ 西村太志・片桐咲恵・古谷嘉一郎・相馬敏彦・長沼貴美 (2016). 子育てにおける「社会的代理人」選択に関する規定要因の検討 (1) -関係流動性とシャイネスの交互作用に着目して- 日本社会心理学会第57回大会, 234. (関西学院大学, 2016年9月)
- ⑪ Nishimura, Takashi., Furutani Kaichiro., Soma Toshihiko., & Naganuma Takami. (2016). Child-rearing and social networks in Japan: From a viewpoint of the homogeneity and the heterogeneity of parental social networks. in "Social Networks in diverse Sociocultural contexts: Parenting, psychological adjustments, and networking motivations" (Chair: Igarashi, T.; speakers: Hirashima, T. & Igarashi, T.; Sadewo, G. & Kashima, E.; Nishimura, T., Furutani, K., Soma, T., & Naganuma., T.), The 23rd International Association for Cross-Cultural Psychology (Nagoya, Aichi, Japan). (2016, Aug. 1).
- ⑫ Nishimura Takashi., Katagiri Sakie., Watanabe, Aki., Furutani Kaichiro., Soma Toshihiko., & Naganuma Takami. (2016). Who uses their spouse as a "social surrogate"? A study of the social surrogate hypothesis as regards social network expansion among mothers with preschool-aged children. Poster presented at 31st International Congress of Psychology (ICP 2016). Yokohama, JAPAN. July 28th, 2016.

[図書] (計 1 件)

- ① 谷口淳一・相馬敏彦・金政祐司・西村太志 (編著) (2017). エピソードでわかる社会心理学-恋愛関係・友人関係から学ぶ- 北樹出版

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：相馬 敏彦

ローマ字氏名：Soma Toshihiko

所属研究機関名：広島大学

部局名：社会科学研究科

職名：准教授

研究者番号 (8桁)：60412467

研究分担者氏名：古谷 嘉一郎

ローマ字氏名:Furutani Kaichiro

所属研究機関名：北海学園大学

部局名：経営学部

職名：講師

研究者番号 (8桁)：80461309

研究分担者氏名：長沼 貴美

ローマ字氏名：Naganuma Takami

所属研究機関名：創価大学

部局名：看護学部

職名：教授

研究者番号 (8桁)：80432714

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。